

## JISS所報

2007年09月30日発行・・・所報No.340

## 目次

スウェーデンと日本の安全保障

鍛冶 俊樹

62回、63回、64回スウェーデン研究連続講座

62回

カロリンスカ医学研究所とがんの研究 - 日本に滞在して

クリスティーナ・パーソン

63回

スウェーデンの児童文学の大いなる遺産 ～『ニルスのふしぎな旅』を訳して～

菱木 晃子

64回

スウェーデンの政治体制——緑の党の役割を中心に

中嶋 瑞江

## 特集

スウェーデン人が評価した梶原照雄の野鍛冶

## 随想

100年前にスウェーデン婦人が「茶の湯」を著していた茶室・瑞暉亭の思い出

JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所 所報

No.340 2007年9月30日発行

発行所: 社団法人スウェーデン社会研究所

〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1

株科学新聞社内5階

連絡事務所

〒124-0024 東京都葛飾区新小岩2-19-7

Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596

e-mail: [sweden@tkm.att.ne.jp](mailto:sweden@tkm.att.ne.jp)URL: <http://home.att.ne.jp/apple/jiss/jiss.htm>

発行人・編集責任者: 林壮行

Publisher&amp;Editor in Chief: Takeyuki Hayashi

編集者: 久保田健司

Editor: Kubota Takesh

## スウェーデンと日本の安全保障

軍事ジャーナリスト 鍛冶俊樹

「インド洋から海上自衛隊が引き揚げるかどうか」ーが、日本の政治の焦点のひとつとなっている。

これに関して、ある民主党の議員が「海上自衛隊が引き揚げれば、確かに日米安保体制に亀裂が入るかもしれない。しかし、いつまでも自国の安全保障を米国に依存していることこそ問題だ。自分の国は自分で守る。それが基本でなければならない。」という趣旨の発言をしていた。

かつて、日本社会党が非武装中立論を唱えていた頃を思い出すと、野党も変われば変わったものだと、まさに隔世の感がする。

非武装中立論華やかかなりし頃、それが如何に現実的でないかの例証として、しばしば持ち出されたのが「スウェーデンの安全保障政策」だった。

スウェーデンは武装中立を建前としている国であり、軍事的な同盟国を持たない代わりに強力な武装を持つ。つまり、中立を保つためには自分を守るための武力が必要だと考えてきた。この政策は冷戦終了後も基本的に同じで、EUには加盟しても軍事同盟であるNATOには今なお加盟していない。

スウェーデンにとって、歴史的にも現在も脅威はロシアだが、半島に位置していて3面が海であり、ロシアとの間にはフィンランドという緩衝地帯を有している点で、ロシアと海という緩衝地帯をもって隣接している我が国と似た状況にあるともいえる。

さて、そのスウェーデンの軍事力はどれぐらいか、という総兵力で2万7600人、これは人口が14倍の日本に換算すると約39万人に匹敵する。日本の自衛隊の総兵力が24万人であるから、その約1.6倍である。

国防費は2005年で52億ドル(約5980億円)、これも人口比で換算すると日本の728億ドル(約8兆3220億円)相当。やはり日本の防衛費の約1.6倍になる。

つまり、スウェーデンの国民は日本の国民に比べて一人当たり約1.6倍の国防負担を背負っている計算になる。

しかも、国防の負担はこれだけではない。スウェーデンでは徴兵制が採用されており、男子は7~15か月の兵役が課せられ女子も志願すれば同様の兵役が課せられる。

なぜ徴兵制を維持しているか、と言えは人件費を安く抑え込みたいからだ。徴兵制なら安い給料で兵を招集できるが、すべて志願兵制で集めるとなると、高めの給料を設定しなければならない。

では、人件費を抑え込んでその分、国防のどこに力を注いでいるか、と言えは空軍力である。

スウェーデン空軍は167機の作戦機(軍用に供される飛行機)を擁している。日本も航空防衛力には力を注いでおり、アジアでは有数の防空能力を誇るが、その作戦機数は約350機である。人口比換算でいうなら、スウェーデンは日本の7倍近く空軍力に力を注いでいることになるわけだ。

しかも、その航空機はサーブ・ビゲンという自動車メーカーとしても世界的に有名な国策会社の製品である。米国と同盟国ではない以上、日本のように米国の優秀な戦闘機を買ってくるわけにはいかないの、全て自国開発である。

防衛対策にも地理的条件を生かして、独自の工夫をこらしている。

スウェーデンの高速道路は、広くまっすぐに岩盤をぶち抜いて作られている。この高速道路は、ただちに戦闘機の滑走路になるよう設計されており、さらにフィヨルドをくりぬいて戦闘機の秘密基地を随所に設けている。

人口の少ないスウェーデンは、陸軍の兵力では所詮ロシアの敵ではない。そこで最新の空軍力によってこの不足を補おうと必死で努力している姿が浮き彫りになる。

兵力不足を指摘したが、実はここにもからくりがある。兵役期間が終了すると兵員は社会復帰するが、それで軍隊と縁が切れるわけではない。予備役に編入され社会復帰後も定期的に軍事訓練を受け、有事の際にはただちに軍に召集される。こうして万一の際にはたちまち26万人以上の軍隊が出現する。

武装中立を実現するために、国民に多大な負担を課して「高度国防国家」を実現しているのがスウェーデンなのだ。

日本も自主防衛を云々するなら、こうした国民の負担についても考えてみなければなるまい。もちろんスウェーデンよりも人口や経済規模がはるかに大きい日本にしてみれば、こうした負担増は容易に吸収できると考えられるかもしれない。

しかし、スウェーデンはロシアだけが脅威なのに対して、日本はロシア以外に北朝鮮や軍拡を続ける中国を考慮に入れなければならない。スウェーデンがあまり力を入れる必要のない海軍力にも、相当の力を入れなければならないはずであり、負担はやはりそれなりに大きなものとなる。

確かに、冒頭に紹介した民主党議員の言ではないが、いつまでも対米依存を続けられるのか、日本を取り巻く環境は不透明な情勢になっているのも事実である。

今一度、武装中立国家スウェーデンを真摯に見つめなおしてみる必要があるようだ。

鍛冶 俊樹(としき)

1957年、広島県生まれ。83年、埼玉大学教養学部卒業後、航空自衛隊に幹部候補生として入隊。情報通信関係の将校として、10年間の勤務を経て、一等空尉にて退職。評論活動に入る。95年、「日本の安全保障の現在と未来」で、第一回読売論壇新人賞佳作に入選。著作に「戦争の常識」(文春文庫=2005年)がある。

Copyright (C) 2007 Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.

## 第62回 カロリンスカ医学研究所とがんの研究 — 日本に滞在して

国立がんセンター 予防研究部  
外来研究員(カロリンスカ研究所)  
クリスティーナ・パーソン

私はスウェーデンのカロリンスカ医学研究所の研究員クリスティーナ・パーソンである。現在、日本の国立がんセンターで疫学・生物統計学の見地から、がんの研究をしている。本日は、カロリンスカ医学研究所のこと、私の専門の疫学・生物統計学のこと、そして私の日本での研究のことや、私の日本の印象についてお話したいと思う。(なお、パーソン氏は7月にスウェーデンへ帰国。現在は当地で研究を続けています。編集部・注)

## カロリンスカ医学研究所

カール13世の命によって1811年に設立された医学研究所は、1822年にカロリンスカという名前がつけられた。スウェーデンには15の大学と22の総合大学があり、学生は奨学金によって無料で学ぶことができる。

カロリンスカ医学研究所(以下KI)は、スカンジナビアで最大の医学大学で、2010年にはヨーロッパでは有数の医学大学になることを目指している。KIはノーベル医学生理学賞の選考を担当していることで世界に広くその名が知られている。ノーベル医学生理学賞は毎年KIの50名の教授によって選考されるが、私の上司もその選考委員の一人である。

KIの主な目標は、研究と教育によって人々の健康を推進することである。KIの収入は総額680億円(2005年度)で、その半分近くが政府の補助金によるものであり、その他は企業の寄付金などである。22の学部があり、3,600人の職員、1,300人の主任研究員、309人の専任教授、2,080人の大学院生、5,480人の学部学生がいて、がん、循環呼吸器、伝染病、免疫学、神経科学、公衆・国際衛生などの分野をカバーしている。

KIは北アメリカ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリアなど世界中の研究機関と提携して共同研究や学生交換を行っている。日本とは、大阪大学、理研、科学技術振興機構、大日本住友製薬等と共同研究を行っている。日本との共著論文の数は年々増えている。昨年は180を越えた。

## 疫学・生物統計学部門について

私の専攻している疫学・生物統計学部門(MEB)のことについてお話ししよう。MEBでは、がん、遺伝学、伝染病学など疫学一般、生物統計学を研究している。MEBとしての国際提携も数多くあり、日本では国立がんセンターと組んでいる。

疫学では何が病気の原因になるか、どうすれば治るのかを研究する。我々は病気をいろいろな角度から研究している。例えば、幼時の生活環境が後の発病に影響することがある。過去の衛生環境などが、後の健康状態に影響していることもある。また遺伝子が疫病に関係する。家族歴は遺伝学の問題だが、家族内での伝染もありうる。肉体的運動など生活習慣の問題もある。

外部環境の影響のなかで、食事は重要な要素である。喫煙の影響は大きい。しかし、人によってはアルコールの分解酵素の多少があるように、同じ食物を食べても反応は人によって違う。疫学・生物統計学では、これ等の要素と病気との因果関係をいろいろな角度から総合的に研究する。

## ヘリコバクター・ピロリとは

私がKIで研究の対象にしたのは、胃の中に住みついて胃がんや胃潰瘍を引き起こすバクテリア、ヘリコバクター・ピロリ(Hピロリ)である。私はこのバクテリアが引き起こす病気を、疫学・生物統計学的に調査することを研究テーマとした。

ここでHピロリについて少し説明する。Hピロリは2005年に私の上司(バリー・マーシャル教授)を含む二人の学者によって発見された。二人はこの業績によりノーベル賞を受賞している。彼らは(それまで一般に言われていた)胃潰瘍や胃がんは、食物やストレスが原因で起こるものでなく、これ等の病気を引き起こすバクテリアがあることを提唱したが、当初は誰も信じなかった。1875年、ドイツの科学者が人の胃の中になんか状のバクテリアを発見したが、培養することが出来なかったため、忘れられていた。オーストラリアの病理学者が再発見して二人で研究を続けたところ、あ

るとき偶然に培養することができた。二人は最初の論文で、胃炎や胃潰瘍は従来言われていたストレスや刺激性食物ではなく、細菌の感染によるものと主張した。しかし、誰もが胃の酸の中で微生物が生存できるはずがないと言って信じなかった。彼は正しいことを証明するためにHピロリを自分で飲み込んだ。十日後に内視鏡で見ると、潰瘍になっていてHピロリがあった。結論としては、潰瘍の治療には抗生物質が有効だということである。

#### カロリンスカでの私の研究

世界中の半数の人々がHピロリに感染しており、治療しなければ生涯続く。通常は穏やかな炎症反応であるが、場合によって胃潰瘍、十二指腸潰瘍、粘膜関連リンパ組織または胃がんになる。前述のように、この細菌は炎症を起こすが、その症状は細菌の遺伝子と患者の遺伝子によって異なりさまざまな様相を示す。細菌と病気は関連があることは分かるが、因果関係ははっきりせず、すべての人が発症するわけではない。

私はこの細菌とがんとの関係を遡及調査で調べた。遡及調査では、患者が発症を促がすような何かの要因にさらされていたか、をアンケートなどより調べる。または、数年前に血液検査をして、現在、罹患している人を探す。しかし、調査結果が以前の調査結果と合わないこともある。これは調査対象の違いによるものかもしれない。民族の違い、あるいは年齢・性別・家族歴などを考慮に入れなかったこと、または調査の質などが原因かもしれない。研究の成果は複雑なので、ここでひと言では述べられないが、私が研究でとった方法を述べておこう。

私は多くの関連する文献を統計的に見なおす方法をとった。具体的には16,000の文献の中から内容の重複しているものなどを省いていき、最終的に約70の文献を対象を絞り込んだ。その上で内容を分析して、例えばアジアと非アジアではどのような違いがあるかを調べたのである。

#### 日本での私の研究

現在、私は国立がんセンターで胃がんの研究を続けている。胃がんは世界で毎年934,000の症例があり、その56%がアジアである。胃がんの発生数の多さは、肺がん、乳がん、結腸直腸がんについて4番目である。しかし、死亡の多さは2番目に位置する。胃がんにかかった場合、5年生存率はヨーロッパでは20%であるが、日本では40~60%と生存率が高い。これは日本では健康診断が頻繁に行われ早期発見されるからであろう。それでも日本ではがんの死亡数は胃がんが一番多い。男女別では男性のがんの発生は女性に比べて1.5から3倍も多い。このように日本では胃がんは独特の発生の仕方を示すので、私はこれを日本での研究テーマとした。

日本の国立がんセンターでの私の仕事の一部を紹介する。調査の基本にしたものは、JPHC (Japan Public Health Center) によって1990年代に始まった、140,420人を対象としたアンケートで、その情報の中から胃がんに関係しているかもしれない既往症、喫煙、食事、家族歴、ストレスなどを調べている。食品摂取調査では、138種類の食品について、三日間の摂取記録で病歴のアンケートも行っている。

国立がんセンターは、がんの関係だけでも多くの出版をしている。

#### 私の日本の印象

日本の皆さんは大変に親切で、よく助けてくれる。美しい国で、銀座など都市中心部と地方とのコントラストも素晴らしく、すべてが綺麗に整理され、トイレにも使い方のマニュアルが置いてあるなど、綺麗さの面では私の目からみるとパーフェクトである。日本で特に感じることは食べ物がとてもおいしいことで、イタリア料理とかスウェーデン料理でさえも本国で食べるよりおいしい。

日本で問題と思われるのは、英語が話せる人が少ないことである。日本の人は皆親切だが、英語が通じないことで外国人には暮しにくい。研究所でも日本人同志は会議や研究会は日本語なので、外国人は討論等に自由に参加できない。日本がもっと国際的に活動するためには、皆が英語を使えるようになったほうがよい。

(講演抄録文責 JISS所報編集部)

Copyright (C) 2007 Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.

## 第63回 スウェーデンの児童文学の大いなる遺産～『ニルスのふしぎな旅』を訳して～

翻訳家  
菱木 晃子

本年はスウェーデンのノーベル文学賞作家セルマー・ラーゲルレーヴの長編童話「ニルスのふしぎな旅」の初版が出版されて百年目にあたる。丁度この節目にあたる今年、私が翻訳したこの本の日本語版『ニルスのふしぎな旅』上・下(福音館書店)が出版された。

本日はこの翻訳を通じて私が感じた、ラーゲルレーヴがこの作品を通して、子供達だけでなく世のあまねく人々に何を伝えたかったのか、そのメッセージを私なりの解釈で語ってみたい。私の話がこれからこの名作を読まれる方々へのイントロダクションなれば幸いである。

## 物語の生まれるきっかけ

19世紀後半から20世紀初頭にかけてのスウェーデンは、産業革命によって工業化がおし進められ、世の中が大きく変わろうとしていた。その頃、スウェーデンでは教育への関心が高まり、国民学校の教師達は、子供達がスウェーデンの地理について楽しく学べる新しい本が必要であると考えた。そして、その執筆をラーゲルレーヴに依頼したのである。

依頼をうけたラーゲルレーヴは、この本を地理のみならず、スウェーデンの風景や動植物、歴史や人々の暮らしにまで対象を広げ、しかも物語として子供達が楽しく読める読み物にしようと考えた。しかし、ラーゲルレーヴといえども、このいくつかの条件を備えた物語を書くことは容易ではなかった。大変悩んだ末、ラーゲルレーヴは昔おばさんから聞いた話からアイデアを貰い、イギリスのキップリングの作品からヒントを得て、動物達を擬人化して少年をガチョウの背中に乗せ、スウェーデン中を旅して回るという物語の構想を思いついた。こうすれば人間の目で国中を鳥瞰するという物語ができる。このようにして「ニルスのふしぎな旅」は具体化された。

## 物語のあらすじ

スウェーデンの南部スコーネ地方の貧しい農家のいたずらっ子ニルスは、古い屋敷に住むといわれるトムテ(小人の妖精)をからかったばかりに小人にさせられてしまう。小人になったニルスは、いきがかり上、それまでは庭で毎日いじめていたガチョウのモルテンの背に乗って、渡り鳥のガンの群れと共にスウェーデンの国中を飛び回ることになる。長い旅の間にニルスは祖国の美しい森、湖、古城、街を見、多くの動物達に遭遇し、そしていろいろな事件に巻き込まれる。その経験からさまざまなことを学んだニルスは立派な少年に成長し、スコーネの両親のもとへ帰ってゆく。

## この本の読み方

『ニルスのふしぎな旅』は55章によって成り立ち、さまざまな事件や、民話や伝説など、章毎に独立した逸話の積み重ねで構成されている。この本の読み方は、成立のいきさつから児童向け少年冒険小説としても読めるし、スウェーデンの地理、歴史、動植物の教科書としても読める。しかし、この本は全編にわたって作者の高い見識と鋭い観察に支えられた、人間への深い洞察と愛と善意で貫かれているので、他にもいろいろな観点から読むことができる。以下その読み方のいくつかを紹介しよう。

## 読み方—その1

まず挙げておきたいのは、この本はニルスという子供の人間としての成長物語であるということである。いくつかの章を例に引いて説明する。

第2章[ケブネカイセ山のアッカ]では、ガンの群れから見離されて死にそうになったガチョウ(モルテン)を、ニルスは水辺に連れていき助ける。お礼にモルテンはニルスに食べ物(小魚)をとってくる。それまで仲の悪かったニルスとモルテンだが、個々に力はなくともお互いに助け合えば両者共強く生きていけることを知る。

第3章[野鳥の暮らし]では、ニルスはガンの隊長アッカから、世の中には命を脅かす敵(キツネ、イタチ、ヘビ、タカ

など)が沢山いるが、それ等の敵から身を守るには、小さな動物達と仲よくすることだと教えられる。この話を聞いたニルスは、危険を冒して子リスたちを農家に捕らえられているリスの母親のところへ運んでやり、親子リスを助ける。ガン達はニルスの勇気ある行動に感心し、それまでニルスやモルテンに対してとっていた態度を変えて、彼等を旅の友として受け入れる。

第4章[クリミンゲ城]は、土着の善良なクマネズミが外国から侵入していたドブネズミに駆逐されそうになる話である。ニルスはドブネズミに味方する動物達の要請をうけて、ハメルーンの笛吹き男のように笛を吹いてドブネズミを追いついてしまい、土着の動物達の平和を守る。この働きが認められて、ニルスは多くの動物達から仲間として加えて貰えるようになる(第5章)。

以下、このような逸話は全編にわたって出てくるのであるが、それぞれの場面でいろいろな体験を重ねるうち、ニルスは他者を助けることは自分も他者から助けて貰えることという協力の精神を学び、社会の中で自立して生きていくことの重要性を知る。こうして、自己中心的でどうしようもないはずだったニルスは、幾多の経験を通して思いやりのあるたくましい少年に成長していく。すなわちこの本は、一人の子供が社会的人間として成長していく、人間成長物語としても読めるのである。

### 読み方—その2

この本は、人間というものは、他の動物にない優れた知恵や創造力を備えた素晴らしい存在であることを語っている物語でもある。ラーゲルレーヴはニルスを小さな動物達と同じ立場に立たせることにより、人間の成した偉業を、人間達のする会話や話をニルスがそれらを又聞きする形をとることで客観的に表現しようとした。

例えば、第9章[カールスクローナ]では、運航の町カールスクローナの広場に立つ五百年前のスウェーデン国王カール11世の銅像と、募金箱の人形の二人の幽霊と一緒にその町にある海軍基地を見て回ることになるが、カール11世からスウェーデン造船技術の素晴らしさと、輝かしいスウェーデン海軍の歴史を聞き、人間の力の大きさに感動すると共にスウェーデンの祖先を誇りに思う。

また第37章[ストックホルム]では、小さな漁村であったストックホルムが、いかに多くの人の力で現在の立派な街になったかを、ニルスを助けてくれた老人を通して聞き、先人の成した偉業に敬意を表している。

### 読み方—その3

この本は、人間と自然のかかわり合いについて書かれた本でもある。

それは第39章[イェストリーグランド地方をこえて]での山火事であって荒れ果ててしまった山を、子供達が先頭に立って木を植えていくことで山を復活させていく話とか、第42章[オンゲルマンランド地方の朝]で、全てを焼き尽くす恐ろしい山火事を、人間の知恵と努力で防ぎ止める話の中から読みとることができる。

特に印象的なのは第19章[大きな鳥の湖]の話である。鳥達の楽園である湖を干拓することで、農地を広げようとしていた農家の家族が、その家のひとりっ子が湖で迷子になった事件をきっかけに、自分のしようとしていたことを反省し、干拓をやめるという話であるが、この話は、現在の環境破壊問題とびたり一致する。こういう話から、ラーゲルレーヴは百年も前に人間による自然保護の重要性を説いていたことが分かる。

### おわりに

以上、この本の読み方の例を私なりにいくつか挙げたが、この本は読む人の年齢、経験等によっていろいろな読み方ができると思う。例えば、ラーゲルレーヴの人生観、死生観は20章、22章、44章などから読み取れるであろう。

しかし、ラーゲルレーヴがこの本で後世の人に伝えたかったメッセージのうち重要なことのひとつは、第54章の中で、ガンの隊長アツカがニルスへ別れるにあたって語る以下の言葉に集約されていると思う。

「人間はこの世に人間だけで暮らしているのではない。人間は広い土地を持っているのだから、我々貧しい生き物が安心して暮らせるように、岩ばかりの島や浅瀬の湖、沼、湿地、人里離れた森などを少しぐらい残してくれてもよいと思うのだ」

(講演抄録文責 JISS所報編集部)

## 第64回 「スウェーデンの政治体制——緑の党の役割を中心にして」

外務省 海外邦人安全課 海外安全相談センター室長  
中嶋 瑞江

わたしは外務省に勤務して過去に2度、スウェーデンに外交官として赴任した。外務省では外交政策、安全保障政策の研究に取り組む人が多い。しかし、わたしはスウェーデン滞在の経験から、環境政策に興味を持った。1990年代の半ばには、国連の下部機関「アジア太平洋経済社会委員会」を担当し、92年にはブラジルのリオで行われた環境サミットに携わった。北欧は環境問題についての意識が高いこともあり、スウェーデンの政治体制の中で、「環境と緑の党」をテーマに論文を発表した。きょうは、緑の党、正式には「環境と緑の党」を中心に、スウェーデンの政治体制について話をさせていただく。

## スウェーデンの環境政策

まず、スウェーデンの環境政策全般について。スウェーデンは60年代後半から70年代にかけて、地理的な条件による酸性雨の被害を受けた。ユーラシア大陸と英国からの大気汚染による酸性雨が降り、森林や湖沼の生物が被害を受けた。こうした越境汚染に対して、一国では対処ができない。国際会議を開いてアピールするべきとの声が高まり、1972年に首都のストックホルムで「国際人間環境会議」を開催した。その一方で、国内では90から91年にかけて環境のための税制改革を行った。「炭素税」の導入である。汚染者負担という原則から汚染排出源に税の支払いを求めたのである。同時に、いち早く廃棄物の分別にも取り組んだ。99年には「環境基本法」を制定。それまでの環境関連法令を、約10年の時間をかけて、ひとつにまとめて分かりやすい法にした。

## スウェーデンのエネルギー事情

一番の問題は原子力発電である。スウェーデンは1980年6月、原子力発電に関する国民投票を行った。79年に米国ペンシルベニア州スリーマイル島で起きた原発事故が背中を押した側面もある。投票の選択肢には3つのラインがあった。

「ライン1」は、原発容認である。これは当時の与党であった保守系の穏健党が支持した。支持率は18.9パーセントだった。

「ライン2」は、条件付原発容認である。現在稼働中のもの、完成済みの施設に加えて建設計画中の12基の原発は、石油依存度を下げたため、また再生可能エネルギーの利用が可能になるまで使用する、というもので、社民党(野党)と保守中道派の自由党(与党)が支持した。支持率は39.1パーセント。

「ライン3」は、原発廃止。保守中道の中央党(与党)と共産党(野党)、およびキリスト教民主党(野党)が支持。支持率は38.7パーセント。

投票結果は、どれも過半数を取れなかった。すぐに廃止は現実的でないという判断で、国会は現実的というか玉虫色の決議を出した。すなわち、当初計画の12基の原子炉は稼働させる。代替エネルギーを積極的に開発し、かつ原発の安全基準を強化する。そして2010年までに12基の原子炉をすべて廃止にする、とした。その結果を受けて99年、パッシュベック原発1号機が閉鎖された。

しかし、その後、与野党で話し合いがもたれ、全廃案は修正された。残りの原発廃止については、閉鎖目標期限は撤廃し、将来に向けて徐々に減らす—という現実的政策へ変更された。2005年5月にはパッシュベック原発2号機が閉鎖されたが、全廃の道は遠のいた。

## 「環境と緑の党」の結成

党が結成されたのは1981年である。当時、スウェーデンの政治状況は5つの政党が社会主義ブロックと非社会主義ブロックに分かれて対立、1973年の総選挙では両者が総議員数350名を175名ずつ獲得。まったく同数となって、本会議での票決がこう着状態に陥ることもあった。そのため76年から議員総数は349名へ、1名減となったという経緯があった。

環境と緑の党は、そういう中で結成された。創設者はペール・ガットンである。元自由党の議員。同党の仲間を募って新党結成に動いた。エネルギー政策の項でみた「ライン2」には不満で、環境問題に関心のある者を結集した。支



持者は都市の青年層、高学歴者、女性とくに公務員たちであった。党のシンボルはタンポポであった。太陽のように明るく、アスファルトを突き破って生えるたくましさ象徴するためだったという(このタンポポの図案は、後に変更された)。だが、結成当初、この党は長続きしないとみられていた。創設者のペール・ガットン、飲酒運転で逮捕されるなど、人格的にふさわしくない行動をとっていたのも汚点になっていた。

#### 「環境と緑の党」の特徴と創設10年間の動き

党は「環境保護」「地方分権」「男女平等」「平和」「軍縮」「人権」に取り組むこととした。目立った言動としては、選挙に際してクオータ制、割り当て制を採用した最初の党になったということがある。これに影響されて、社民党は94年の総選挙から、党の候補者名簿の順番を男女交互に記載するようになり、他の党も見習うようになった。また、動物愛護の観点から、「馬を8時間以上の長距離輸送禁止」を訴えて話題になった。82、85年の選挙では得票が伸びず、国会進出は果たせなかった。党員は一人5000クローネ(約7万5000円)を借金して、それを党に貸し出す形を取って選挙資金を作ったが、実らなかった。支持率は3パーセント以下で、党首対論への出席も拒否された。

が、88年には一気に20議席を獲得、支持率は5.5パーセントだった。急成長の理由としては、ひとつには86年に起きたロシアのチェルノブイリ原発事故がある。これで大気汚染とエネルギー問題が注目されるようになった。88年には、大西洋の西海岸でアザラシの大量死亡事件が起きた。これで環境汚染が問題になった。相次ぐ事故で「緑の党に風が吹いた」と言われたが、選挙の結果がそれを裏付ける形になった。他のすべての党も環境保護を訴えたが、環境と緑の党は先を行っていた。政党助成金を受ける資格もできた。政党への国庫補助制度を利用して、事務所維持費、人件費を捻出できるようになった。

アーシュランド党首は、初登院で手編みのカーディガンを着た。ドイツの緑の党の党首がGパンとTシャツで登院したのを意識して、カジュアルをアピールしたといわれた。84年には、ポーフォシュ事件で名を上げた。スウェーデンの武器製造会社・ポーフォシュが、紛争地に武器を密輸出したのではないかという疑いがもたれた。武器関連法違反の疑いがある、そのような武器輸出は反対であると、国会で述べて注目を集めた。

#### 1991年以降の選挙と活動

91年の選挙では敗北を喫した。スウェーデン社会の経済危機が背景にあって議席はゼロに戻った。これを機に党組織の再建強化に取り組んだ。環境問題という単一争点主義政党から脱皮、EU反対政党になった。EU参加後は、EU議会内に4議席を確保し、内部から改革を目指す主張した。

94年9月の選挙では18人が議席を得た。社民党から閣外協力を要請されたが、政策面での不一致があり実現はしなかった。しかし、98年の総選挙では16名に議席を減らしながら閣外協力政党になった。当初は「経済」「雇用」「公平な分配」という3分野での協力だったが、のちに「環境」と「男女平等」の2分野を加えた。政策決定に当たってキャスティングボードを握る立場も得た。02年には1議席増の17名を送り、社民党に閣僚ポストを要求するも成功しなかった。しかし、4年間の閣外協力が評価され、環境省と農業省などへの党職員のポストが確保された。国会では北海たら漁の禁止、国防予算の削減、ストックホルム混雑税の導入を提案して、社民党に受け入れられた。

#### 「環境と緑の党」の成果と役割

2006年9月の総選挙では政権が交代した。社民党が野に下り、穏健党、中央党、キリスト教民主党が与党になり、環境と緑の党は社民党との閣外協力を解消した。

ここまでの党の成果をあげてみると、まず政界へ新風を送ったこと、法案や政策に対してラディカルな影響を与えたこと、環境関係予算の増加に寄与したこと。98年に11億7800万クローネ(約176億7000万円)が、04年には38億4800万クローネ(577億2000万円)へ増額した。もちろん、環境と緑の党だけの力で増額したわけではないが。そしてストックホルム混雑税導入がある。マイナーなりに存在感を維持しているのではないかと、わたしは評価している。

#### スウェーデン滞在期間中に感じたこと

立法府について言えば、政治家が国民と対話する状況を積極的に作る、ということだ。秘書だの事務所だのと、手続きの煩雑な日本とは違った。社民党の財務大臣は国民からの手紙にすべて回答したという。わたし自身も国防大臣にファックスを送って面会を実現した経験がある。まさか返事は来ないと思っていたのに、やり繰りして時間を割いてもらい感激した。

マスメディアは倫理規定が厳しく、政治家から食事に誘われても断る、というプレスコードがあった。プレスは自由であり束縛されないというジャーナリストとしての姿勢を持っていた。穏健党の議員が南アフリカの視察旅行をしたとき、その目的が観光ではなかったかと、厳しく書いた。議員のタクシーチケット乱用にも怒りの告発をした。ちなみにスウェーデンでは専用車が与えられるのは閣僚のみ。一般議員はタクシーを利用する。

そして、最後に「女性を意識しないで仕事ができる」という社会に、何よりも感銘を受けたことを申し述べておきたい。

(講演抄録文責 JISS所報編集部)

### スウェーデン人が評価した梶原照雄の野鍛冶

日本の伝統工芸がスウェーデンで評価された。梶原照雄さんの「野鍛冶」(のかじ)の実演である。梶原さんは、高知県高岡郡四万十町で「黒鳥」という鍛造工場を個人で営んでいる。江戸時代から続く「野鍛冶」という、この地方独特の鍛冶方法で、いまでは梶原さん一人が伝統を受け継いでいる。その梶原さんが、ストックホルムの「テクニスカ・ミュージアム」(科学技術博物館)で実演を披露した。

2005年9月7日から13日まで、テクニスカ・ミュージアムで「日本と北欧における鋼鉄工芸品と刀剣の科学と芸術」というセミナーが開催された。主催者は「刀剣と鍛冶文化の日本交流協会」で、アジアのユネスコ活動の一環として企画された。このセミナーに梶原さんも出席を要請され野鍛冶を実演し、スウェーデンの鉄鋼職人たちに感銘を与えたのである。

セミナーではスウェーデン王立研究所のマリエ・ニッセル氏、ドイツウルム大学のフェック教授らが講演。サムライの時代とバイキングの時代における刀剣の類似点と相違点について、また古代の刀剣作りと現代のナノテクノロジーとの関連性についてなどの話があった。あわせて、博物館前の広場で日本とスウェーデンの職人が、公開デモンストレーションを行った。

このデモンストレーションとセミナーの様子は、鉄鋼管理機構の機関紙が報道した。スウェーデンの博物館で、このような伝統的なサムライとバイキングに関するセミナーが開催されたのは初めて。伝統的な技法は、どのように近年まで伝わり残ってきたか、鉄はいつ、どこで使われ始めたかなど、日本の歴史についても紹介された。

実演の中で、報道が焦点を当てたのは、梶原さんの仕事だった。新聞でスウェーデンの職人が感想を述べている。その部分を全訳する。

「わたしたちが実演をひと休みして、日本人の職人たちの仕事を見学する時間があった。その中でとくにわたしたちが魅惑されたのは、鍛冶屋のカジワラ・テルオ(梶原照雄)であった。その、目を見張られるファンタスティックな手作業による仕事振りに、われわれは圧倒された。彼の体は小さかったが、つねに微笑を浮かべながら腕には血管が浮き出て、その怪力はすばらしかった。かれは日本語しか話さなかったので、通訳を通して話を聞いたところ、かれはサムライの末裔であり、1940年代末、かれが子どもの頃に教わった昔の技術を、今でも行えるたった一人の職人であることがわかった。

カジワラは、常に速いテンポで仕事をする。鉄を打ちつけるときは、まるで歌でも歌うような節をつけ、台の横をたたくときには軽い音をたて、交互に響きあうような一定のリズムを持っていた。台の建つ、くぼんだ場所に立って左手でふいごに空気を送り、その間、右手にもったはさみで、作品を溶鉱炉に入れてひっくり返す。それから、手早く大きなかなづちを持ち替えて、早いリズムで作品を1、2度打ちつけて、また台を軽くたたくというのを何度か繰り返す。

1日で斧といくつかの作品を作った。ポンチで斧に穴をあけるという珍しいやり方も見た。一日中働いていたのに、作品は数秒で仕上げたというような気がした」

梶原さんの野鍛冶は、作業場を持たず、野原に穴を掘ってふいごの横座を作り、素人に手伝わせて鉄を打つ、というのが昔からのやり方だ。かなとこ(台)と、づち(かなづち)と、はし(火箸)と、ふいごをリヤカーに乗せて町を歩く。野っ原でもできるところから、野鍛冶と呼ばれたらしい。その素朴な伝統芸がスウェーデン職人の目を引いたのだ。

当時を振り返って、梶原さんがこんな感想を述べた。

「ストックホルムで実演したのは4日間だけでした。スウェーデンに到着して翌日から博物館に出かけ、鍛冶場を用意するのに1日かかった。2日目に作業用の穴掘り。1メートル弱の深さで、わたしが入れるくらいの広さの穴を博物館の前庭に作った。穴を掘っていると大きな岩にぶつかり、松の大きな根っこが出てきたりで苦労しました。3日目に鉄を打ち、4日目に工程をつくった。早朝から夕方まで実演をした。少し離れたところで、スウェーデンの職人が何かやっていたようでしたが、見学する時間もなかった。残念でした。観光も一度だけ、博物館の近くにある塔(カクネスタワー=テレビ塔)に上っただけでした。森の中に町がある、とても美しいところだなという印象があります。後はホテルと博物館をバスで往復しただけ。初めての地なのに残念でした。

土佐の鍛冶は歴史が浅い。室町時代くらいから野鍛冶の原型ができたようです。手仕事は後継者も育たない。いまでは野鍛冶をやるのは私しかいなくなった。それでスウェーデンで実演をしてくれと、東工大で物質化学を専攻されて

いる永田先生から依頼が来たのです。スウェーデンの人が興味を持って見てくれたのはうれしかった。つくったのは、20センチくらいの「えがま」と小さな斧でした。柄のところに通すための穴を開けるのが、かれらには珍しかったようです。

バイキングの剣は一振りだけ見る機会がありました。博物館の会議場の入り口に特別展示されていたのです。たて目にきれいな積層の紋が出ていました。ハガネや軟鉄を重ねて、ねじったり向きを変えて積んでいくと、積層の紋が出てくる。詳しくは聞けなかったので分かりませんが、バイキングの剣をつくるには、かなりの技術を要すると思った。日本刀の紋とは、また別の美しさがあった。材質の違いもあるだろうし、組み合わせも重ね方も違って、バイキングの剣には独特の紋が出る。どんな風にたたいていたのか、今度またスウェーデンを訪れる機会があれば、その辺を調べ、色々な剣を見たいと思う」

Copyright (C) 2007 Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved.

## 100年前にスウェーデン婦人が「茶の湯」を著していた 茶室・瑞暉亭の思い出

産業能率大学講師  
野崎 俊一

私が趣味とし、今はライフワークになっているものに「茶の湯」がある。俗に言う総合芸術の「茶道」。この茶道を生業とする実母に感化され、学生時代から数えると40余年になる。かつて勤務していた新聞社時代にも華道とともに「面」を担当していた。まさに「芸は身をたすく、それとも破る?」。

それはともかく、この間、各流派の家元や研究者らへのインタビューをはじめ、四季折々の茶事や行事を目にする機会も多いなど、茶歴年数の割にはバラエティーに富んだ体験をしているといえるかもしれない。また、こうした茶会に参加するだけでは飽きたらず、自ら茶会を国内外で試みこともしばしば。今春も日本現代手工芸作家協会からの依頼で友人の協力もあって、オーストリアで「ウィーン茶会」を催し、文化交流の楽しみを味わった。

その海外に出かけた折、もうひとつ心がけているものがある。日程の合間を縫ってわが国の伝統文化や施設がどのように受け入れられているかを見聞することだ。

その例をスウェーデンはストックホルム市郊外にある国立民族博物館の茶室「瑞暉亭」(ずいきてい)に見る。同国とは1980年代に新聞社の取材で訪れたのが縁となっている。以来、アクアビットを飲み交わす友人も数多くできるなど、私にとって好感度の高い国である。

さて、この茶室を初めて目にしたのは1993年(平成5年)の夏のことだった。日程の都合で、それまではなかなか実現できなかった。それだけに「やっと対面できた」という当時の心地よい興奮がまだ記憶の片隅にこびり付いている。この思いは3年前に大学院の同窓生と一緒に再び訪れた時にも同じように味わった。この印象記を古陶磁専門雑誌「陶説」に寄稿しており、この折の文を転・引用しながら三度目の追憶をしてみた。

まずは「瑞暉亭」の由来と概略から。

現在の茶室は実は1990年(平成2年)に再建されたもの。文献、資料などによると、そもそもは、半世紀以上も前の1935年(昭和10年)に、日瑞両国の友好の象徴として、製紙王として知られた故藤原銀次郎王子製紙社長が寄贈したものの。その完成を見るまでに数多くの逸話が残されている。そのいくつかを紹介しよう。

建設を立案したのは意外なことに女性。1888年(明治21年)から1921年(大正10年)まで神戸に在住したスウェーデンの貿易商夫人、イーダ・トロツィーヒ女史。滞在中に茶道と華道を学び、その間の1911年(明治44年)、ストックホルムの言語で書かれた最初の点前(てまえ)書ではないと言われるほどの希覯本、「茶の湯」(Chanoyo, Japanernas Teceremoni)を上梓した。執筆は1908年だから、かの岡倉天心が著した「茶の本」に遅れること僅か2年という労作だ。

母国に帰国後の女史は、国立民族博物館で日本展を開催するなど両国の文化交流に情熱をそそぐ一方、念願の「茶室建築」構想は、勤め先の茶輸入商ダグラス・ルンドグレンの援助を受けるとともに、同社を通じてわが国では数寄者でもあった藤原翁に協力を求めてきたという。

これに対し、「友好のために」と快諾した藤原翁。が、同博物館に残る資料の中で半分以上を占める往来書簡では実現までにこぎつけるまでの戸惑いや悩みが綿々と綴られている。

それは建築に当たっての細々とした人選や作庭の手配をはじめ、極寒の気候を考慮して、最初は北陸地方の既存の茶室を寄贈するつもりだったのが、適当な物件が見つからなかったとか、現地からの要望は「四畳半の茶室」などなどの秘話が明らかにされている。

こうした一連の試行錯誤の末、わが国で仮建築され、セレモニーである「茶室披き」には、当時の日瑞協会総裁だった秩父宮殿下ご夫妻を招いて行われた。茶室の由来も、「瑞」はめでたいことを表わす「吉兆」と、スウェーデンの「瑞典」の二つを考慮し、「暉」は両国の未来に向かって輝く光を意味する。名付け親は同総裁。その後140日の航海の末、1か月余で落成した。

さて、茶室のモデルは茶聖と称される千利休が考案したとされる「利休四畳半」と、利休の孫に当たる宗旦が隠居したことになむ「又陰」の席。出入り口が高い貴人口とし、また、天井と屋根組が高いうえ、屋根の勾配が高いことが特徴で、欧米では最初の本格的な茶室だったとか。その後は文字通り、両国の友好の象徴として活用され、今天皇が皇太子時代にも訪れたことが博物館発行のカタログに写真入りで紹介されている。

が、好事魔が多し。1969年(昭和44年)に火災にあい、客が茶室に入る前の場所である「腰掛け」部分などを残して消失。関係者らをはっきりさせ、博物館からの「再建話」が持ち上がるまで約20年の空白期間があった。

再建された茶室は、旧亭との関連で今回も王子グループの手で総工費約1億円をかけて行われた。設計者は茶室研究者の第一人者の中村昌生京都工芸繊維名誉教授。同名誉教授とは2年前に編集・発刊のお手伝いした「徳川譜代大名・安藤家の伝承ごと」(東洋出版)で、推薦文をお願いするなど、何かとご指示を受けている。閑話休題。

その基本構想は藤原翁の茶風を偲ぶとともに、現代の茶の湯にも活用できるものを配慮したとある。

まずは建物の概容から。博物館の一角に位置し、同館のレストランから斜め前方の小高い丘にある。受付事務員の話によると、茶室はセレモニーのある時しか開放しないため、普段の日は茶室を拝見することができない。手元に間取りの資料があるので孫引きする。その上、専門用語が多いので、茶の知識に疎い人には理解するのにやや苦勞かと思いますが・・・。

本亭は広間と小間に勝手水屋。小間は三畳台目に下座床をかまえ、点前座には中柱を立て、炉は台目切り。落天井で、客座は平天井と化粧屋根裏に別れ、にじり口と矩折(かねおり)に二枚障子の貴人口。また、点前座の配置と給仕口を日本襖の低い口という珍しい構えなど、建坪16.4坪に数寄屋建築の粋が結集されている。

では使い勝手はどうか。以前、やはり、友好のセレモニーで日本から駆けつけた茶の稽古仲間によると、「その時は夢中だったけれど、日本の茶室で点前作法するのと違和感がなかった」と聞いたことがあるように、好評のようだ。

次は作庭についての独断と偏見である。大人がひと抱えもある名の知らない針葉樹と芝生の中に折々に黄色の小さな花卉をつけた夏花が咲いている。その傍らには何トンかはあろうかという岩盤がむき出しになっており、排水などの基礎工事が大変だったことだろうと思ったものだ。

蹲距(つくばい)に目を移す。苔こそ生えていなかったが、飛び石は造形的には面白いと思ったが、これらの大小の石はすべてが現地調達で、しかも現地人の庭師の手によるものとか。また、茶室に通じる露地には砂利が敷かれ、その両側にはクローバーやこれまた可憐としかいいようのない紫の花が一種独特の風情をかもしていた。

かくかく左様に、木造建築の伝統のすばらしさが現地の人たちにも着実に理解されていることを垣間見ることができたことは、「心の旅にもなった」と、自己満足している。そして、この「思い」は、2009年夏にも再現できる。世界一周の船旅でストックホルムに寄港することになっており、同行する妻はもちろん、例のアクアビットの友人らを誘おうつもりだ。

## JISS所報原稿募集

JISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。

応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

## 1 応募資

特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受け付けません。

## 2 内容と字数

北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、800字(程度)、1,600字(程度)、3,200字(程度)のいずれかの文長でお願いします。

(まだ文になっておらず、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS所報編集部にご相談下さい)

## 3 掲載の可否と掲載時期

掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。  
送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

## 4 謝礼

ご投稿への謝礼は無料ということをお願いいたします。

## 5 原稿の送付先

原稿は、「JISS事務局 所報編集部」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。